

クリストフ アンドリュー シブニエヴスキー

ポーランド出身

筑波大学 人間総合科学研究科感性認知脳科学専攻 博士課程

「便利で住みやすい国」

日本では強大な都市の中心部であろうと、山に囲まれた小さな村であろうとバスか列車に乗って行ける。どこに行っても喉が渴いたら自動販売機が近くにある。冬は暖かいコーヒー、夏は爽やかなスポーツドリンクをいつでも楽しめる。腹が減ったら 200m 毎に何らかのコンビニか弁当屋またはファミレス等がある。急ぎながら何かを食べたいならコンビニで買った弁当を温めて貰える、場合によって、インスタントラーメンの為にお湯でも提供されている。財布を落としてしまったなど困ったことがあればほとんどの駅の近くに交番がある。一言で言えば、日本は便利で住みやすい国と思う。日本育ちの方々に上述のことは常識だと思うである。けれど、普通は 1 平方キロメートルに最大 3 つの（コンビニと呼べない）小さな店しかない。郵便局かクリニック、スーパーか何らかの専門店かレストランならバスに乗って数キロを旅するしかなかった国から来た私にとって日本は別の世界に見える。比較として、現在の自宅から一番近くの駅（およそ 300m）の周りに 4 つのコンビニと 2 つのスーパー、パン屋、2 つのカフェ、3 つレストランと 2 つファミレス、ベントや 2 つ、ファストフード店 2 つ、1 つずつ焼き鳥と焼肉の店、3 つのラーメン屋があります。さらに、様々なクリニック、動物病院、本屋などがあります。それは駅から出てすぐにある店だけです。ここで、日本人と日本に住む外国人が日本の投資主義に甘やかされていてその様々な望ましい影響について論じるべきであろうと思いますが、日本の「便利主義」を完全に受け入れた私は偽善を避

けたいです。その代わりに、日本における「便利主義」に逆らう現象を指摘したいと思います。人間のあらゆる欲求と気まぐれを、素早く苦労せずに満足させるサービスと商品に溢れた日本の社会では「終電」の存在は不思議です。例えば、仕事が終わって同僚と飲み会に行きたいなら次の選択を配慮しなければならない。夜 12 時頃の終電前に帰るか、翌朝 5・6 時までバーかカラオケなどで発電を待つか、非常に高い夜のタクシーに乗るか。どちらも選択は不便であろう。さらに、飲み会など楽しいことではなく仕事のせいで終電に間に合わなかつたらさらに、面倒なことになるであろう。私は何度も遅くまで、手術か何らかの分析をやって終電に間に合わず、研究室に泊まって、椅子で寝ることしかなかったのは何度もあった。その寝心地が良くない夜に 50 円でどこまでも行けるポーランドの 24 時間運行のバスとトラムのことを思い出す。